

邪見憍慢悪衆生

甲 「先生、私は『このまんま』お浄上に参らしてもらおうと思ってお念仏申しています
が、これでいいのでしょうか。」

乙 「なに言ってるのですか。人のことですか、自分のことですか。本気におなりなき
い。これでいいのでしょうかとは何ごとです。あなたは男ですか、女ですか。」

甲 「わかりきっています。男です。」

乙 「男だと思っっていますがこれでいいでしょうか。そんなことを問うたことがあります
か。」

甲 「それでは私のはまだだめですか。お説教聞けばありがたいのですが……………先生
はつきり言ってください。」

乙 「他人に聞いてもらって『よしよし』と点を下してもらいたいようなご信心がある
ものですか。あなたは本気であるのですか。説教を聞けばありがたい……………そして
心の奥をたたけばなんだか不安心なのでしょう。」

甲 「そうです……………ね。いけないのですかね。私のはまだ……………」

乙 「まるで他力くさいこともありませんね。」

甲 「ひどいことをおっしゃるですね。」

乙 「ひどいことはありません。このままと聞いた聞きぶりを力にして、鬼のあなたがお
浄土。見てごらん、如来がいません。鬼と、自力と、浄土としかないじゃないか。
仏のいない他力がありますか。他力くさい所もない。」

甲 「どうすればいいのです……………」

乙 「どうなつてもだめです。……………なぜですか。……………あなたのような人が如来の
眼をかすめて浄土をとろうとする盗人です。一ぱい仏を食わしてやろうとするペテ
ン師です。香具師です。自分のあさましい心根を少しは知りなさい。」

甲 「いよいよひどいですね。盗人、ペテン師、香具師…………… どうしてそうなので
すか。」

乙 「あなたは信仰をどう考えていますか。ひともうけすることだと考えているので
すか。道を歩ませてもらおうことだと思っっているのですか。あるいは旧式な老人組の
道楽同行たちのように浪花節でも聞くような気にいるのですか。本気になりなき
い。」

甲 「お浄土へまいりたいのです……………」

乙 「薬師如来さんに眼病を治してもらおうというよりも、もつともつと深い幾十倍にし
た欲心です。出なおして来なさい。蓮如様が『浄土にまいりたのしまんとねがい望む
者は仏にならず』と、その手はぶつ切り切つてあります。我慢我欲は信心ではありません。
我慢が通る浄土ではありません。今までその我慢ゆえに迷うたのです。我慢
我執に説教をかぶつて、よろこんで、わかつて、くつろいで……………そして我慢を
通そうというのです。『安心決定鈔』には『いかにして仏の御ころにかなわんと
おもう、仏に追従して、往生の御恩をも、かぶらんずるようにおもうほどに、機の安

心と仏の大悲とがはなればなれになって、つねに仏にうとき身なり。』とあります。仏に追従するために、うき身をやつすのはやめましょうや。そんな根性じゃ、何がどうなつたつてだめです。」

甲 「どうなればいいのかですか。どうすればいいのですか。」

乙 「仏はわれらの生活の上に無限に生きたもう本尊です。もつと本気で如来のみ心を聞きましようや。」

甲 「聞きさえすればいいのですか。」

乙 「まあ本気でそんなことがよく言えますね。聞きさえすればいいのですかとは何事です。真剣勝負です。聞くとは仏が勝つか、煩惱が勝つか、一かばちかの際に立つことです。信仰は話じゃないのです。盗人…… ペテン師……」

甲 「なぜ私がそうまで、ペテン師ですか。香具師ですか。」

乙 「『それ菩薩の仏に帰するは、孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰するがごとし……』 乃木大将は何のために忠義しましたか。」

甲 「それは明治大帝のみ心に生きられたのです。忠義しなければおれなかつたのです。」

乙 「伯爵、陸軍大将、勲一等、功一級、…… そんなものがほしかつたのではなかつたのです。ただ、明治十年西南の役、軍旗を敵にとられた不忠義乃木、つくしてもつくしてもつくしきれなかつたのです。明治大帝は乃木將軍の本尊です。大帝なくして乃木はありません。もしここに、大将になりたさに、勲章や位がほしさに先になつて、忠義をつくす者がいたらどうでしょうか。」

甲 「陛下をあざむき奉る、大不忠のペテン師です。」

乙 「そうでしょう。あなたがじつにそのペテン師です。如来を信心の餌食で釣ろうとするペテン師です。信心を最後の目的とししないで、信心を一つの手段にしようとするのです。真の忠臣は忠を忘れ、真の孝子は孝行を忘れると言います。信心して…… という心、もはやゆるすことのできぬ我慢です。真の忠義は、位や勲章やご褒美が目的でないように、信仰もまた目的があつてはなりません。信仰はただ信仰自体が目的です。」

甲 「私はどうすればいいのですか。」

乙 「まだそんなことを言っているのですか。どうなつたつて我慢は浄土には通りません。それはあなたの我慢を通そうというのです。」

甲 「私はただ苦しいばかりです。ああ私はどうなればいいのです。」

乙 「どんなに浮身をやつしてもだめです。我慢と煩惱のかたまりが何としてもだめです。」

これ…… 静かに聞こうではありませんか。そのあなたのすがたがそのまま二十願を如来にたてさせた悪衆生のすがたです。それがいよいよ最後の自力です。」

甲 「私はその自力がすてたいのです。」

乙 「自力がすてたいという自力です。」

甲 「それでは自力をすてないままですか。」

乙「それはなおさらだめです。化けることはやめましょう。それよりも化けず、つまず、久遠の親心を聞きましよう。今こそ、その親の頭の上をふみ越えて浄土に飛びこもうとする悪衆生ぶりが出てきているのです。そのあなたの今のすがたが、親を泣かせたのです。その心が二十願をたてさせた悪魂です。親泣かせです。その心が、それその心です。それが邪見憍慢悪衆生の正体です。」

甲「え……………この心が……………求道心だと思っているこの心……………がまことに私は何たるペテン師だったのでしよう。悪衆生なのでしよう。」

乙「お氣がつかましたか、あなたの我が生きるのではなくて、如来の本願が生きるのです。如来を生かすのです。『念仏して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候。』如来にうちわをあげさすのです。如来に勝たすのです。」

乙「ありがとうございます。如来を盲にしていました。殺していました。南無阿彌陀仏……………長い間如来に背をむけつつ、輪廻しつつ、私は知らないで、わかつて、よろこんでと、とんだところに力を入れていたのです。皆知らぬままにしていたペテン師でした。なんたる悪衆生でしょう。地獄でも何でも……………私は生きてまいりません。ありがとうございます。今やつとすべて今まで聞いたことがピタつとうなずける時がまいりました。」